

高橋義孝最新隨筆集

ワレハ  
雲ヲ  
愛ス

## 著者略歴

大正2年東京生まれ。

九州大学文学部教授。ドイツ文学者。

著書《文学研究の諸問題》《森鷗外》《現代不道德読本》など、他に評論集、随筆集、翻訳書多数。

現住所 東京都豊島区目白2の4の2

《高橋義孝最新随筆集》

ワレハ雲ヲ愛ス

検印廃止

©1968年

昭和43年4月15日印刷

昭和43年4月30日発行

著者 高橋 義孝

発行者 宮本 孚

印刷 亨有堂印刷

製本 (株)川島製本所

発行所 株式会社オリオン出版社

東京都中央区新富町1の5

振替東京 68782 電話(552)7911(代)

定価 580 円

歌  
愛ス

高橋義孝最新隨筆集



ワレハ雲ヲ愛ス／目次

〈高橋義孝最新随筆集〉

## 目次

ワレハ雲ヲ愛ス	一三
日本人と自然	一六
「解釈学派」の計算違い	二〇
小萩がもとの秋の風	二三
脚下を照顧せよ	二五
シャボンの命は短くて	二六
水平への志向	三三
教育不在の教育	三三
谷崎文学雑感	四一
常識と偶然	四七
失礼論	五三
東京の下町方言	五七

東 男

解らないこと若干

私の好きな言葉

若い人の文体

敬語と日本文化

福井の「さきに」

変えられた国語の体質

日本風の唯美主義

歴史と伝説

「筆で書く」ことの意味

飾り気のないのが本物

「当てる」剣術

寄合世帯

一種の暴力行為

武器

六〇

五九

五八

五七

五五

五三

五一

四九

四六

四〇

三三

二五

二七

一九

三三

危険水位の大学

ジグザグ行進

大学の問題

父

学歴

ただなんとなく

ささえをもたない強さ

受験勉強の功徳

犬が西向きゃ尾は東

教養のある人

順不同・敬称略

やられた、やられた

家庭の中の雰囲気

娘婿

悪風地を払う

二四

二七

二九

三三

三六

四一

四四

四九

五二

五五

五九

六一

六六

七一

七三



ネガティブな面の裏側

古い思い出

眞 贋

無礼者め

寒の汗

そう気取んなさんな

天 寵

たまには素面で

一年に数えるほど

わが養生訓

わが家の書架

音楽と私

秋は来ぬ

なじかは知らねど

Herr Toxikologe I

一七五

一七六

一七九

一八一

一八三

一八七

一九二

一九五

一九七

一九九

二〇三

二〇四

二〇九

二一一

二一五

九州小笑獸会始末

二二七

ちよつと複雑な気持

二二九

ポーラの服

二三三

ポケット

二三五

人生の本

二三九

新店

二四〇

黒雲団々

二四二

時代の推移

二四三

言説及ばざるところ

二四三

力みすぎ

二四四

ある伝承

二四五

土用の稻荷ずし

二四六

稜線上の燭光

二四七

夜半の想い

二四八

僕は食いしん坊

二四九

縞の豎横

味のかなた

寒齋寒餅寒玉子

蚕豆たけの子茶の香り

辣蕪うに蟹みょうが汁

みつ豆甘酒 桜餅

ゆく春や栄螺はまぐり花菜漬

抜き

正月遊びの思い出

目白坂

ぼくのドイツ旅行

ドイツの繁華街

つゆの岡山往訪

陰曆十二月十六日の夕方

飛行機あれこれ

二四二

二四三

二四七

二五一

二五五

二五九

二六三

二六七

二七〇

二七四

二七六

二七九

二八二

二八五

二八八

汽車と飛行機

二元三

取り損ねた見料

二元七

いや、いや

三〇一

旅と食べ物

三〇五

旅仕度

三〇九

あとがき 著者

装幀・オリオン社デザイン室

ワレハ雲ヲ愛ス



## ワレハ雲ヲ愛ス

——君ハ誰ヲ一番愛スルノカ、言ツテミタマエ、謎ノ男ヨ。父カ母カ、妹カ弟カ。

——私ニハ父モ、母モ、妹モ弟モイナイ。

——君ノ友ダチカ。

——君ハ今、私ニ今日きょうトイウ日マデ意味ノ知ラレテイナイ言葉ヲ使ウ。

——君ノ祖国カ。

——私ハソレガイカナル緯度ノ下ニ位置シテイルカヲサエ知ラナイ。

——美シイ女カ。

——モシソレガ不死ノ女神デアルナラバ喜ンデ愛シモシヨウ。

——金カ。

——私ハ金ヲ憎ム、丁度君ガ神ヲ憎ムヨウニ。

——デハ君ハ一体何ヲ愛スルノカ、不思議ナエトランジエヨ。

——私ハ雲ヲ愛スル……アノ流レ過ギ行ク雲ヲ……アスコノ……アノ素晴ラシイ雲ヲ。

ボードレールの散文詩集『パリの憂鬱』Le Spleen de Paris 冒頭的一篇である。

この散文詩を引用しようと思つて、所蔵の原書を家中探し廻つた。本は仏壇の下の開きの中にあつた、もう頁の紙も黄ばんで。扉にペンで誌された日附は一九三二年四月である。この本を買つてから、してみると三十五年の歳月が流れ過ぎた勘定になる、「流れ過ぎ行く雲」のように。——

何が美しいと言つて、何が愛らしいと言つて、何が不気味だと言つて、何が淋しいと言つて、われわれの一生を遡ることなく高い空から見おろしている雲ほどに美しく愛らしく不気味で淋しいものはあるまい。また何が取りとめがないと言つて、雲ほどに取りとめのないものが他にあるだろうか。雲はまことに人間存在に似ている。それは「存在」すると言えば「存在」するが、「存在」しないとせば「存在」しない。雲はありつつ同時にない。そしてこの「ありつつ同時にない」というのが、すべてこの宇宙にあるものの避くべからざる宿命ではあるまいか。

それでも雲には剽軽なところもある。どんな雲も何かに似ている。多くの場合、誇張され、戯画化された人間の顔に似ている。飛行機の小窓から、下に拡がる雲の原を見ると、実にさまざまな面白い、怖ろしい顔が際限もなく並んでいる。そしてその沢山の雲の顔の上を、足を踏みしめて、



どこまでも歩いて行かれそうな気がする。

しかし雲に就いて語ろうとする時、私持ち前の洒落や地口が出ないのはなぜであろうか。